子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル： Associated congenital anomalies and syndromes of 248 infants with orofacial clefts born between 2011 and 2014 in the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル： 口唇口蓋裂を有して生まれた248名に関連する先天性疾患と症候群

ユニットセンター（UC）等名：北海道ユニットセンター
サブユニットセンター（SUC）名： 旭川サブユニットセンター

発表雑誌名： Congenital Anomalies
年：2022 DOI： 10.1111/cga.12496

筆頭著者名：佐藤 遊洋
所属UC名：北海道ユニットセンター

目的：

本研究では、2011年から2014年に口唇口蓋裂を有して生まれた子どもの口唇口蓋裂のタイプと合併症の状況を報告する。

方法：

エコチル調査参加者の103,060件の妊娠のうち、248名の口唇口蓋裂を有する子どもを対象とした。口唇口蓋裂のタイプの割合を算出した。また、典型的な口唇口蓋裂のみの児(孤立型)、無関係な先天性疾患を持ち口唇口蓋裂も有している児(併発型)、症候群または染色体関連疾患の一部として発生した口唇口蓋裂を有している児(症候群型)の割合を算出した。

結果：

口唇口蓋裂のタイプは、口唇口蓋裂が104例(41.9%)、口唇裂のみが68例(27.4%)、口蓋裂のみが58例(23.4%)、分類不明が18例(7.3%)であった。さらに、口唇口蓋裂は、孤立型、併発型、症候群型がそれぞれ73.1%、15.4%、11.5%であった。口唇裂のみでは、それぞれ79.4%、16.2%、4.4%であった。口蓋裂のみでは、それぞれ69.0%、13.8%、17.2%であった。

考察（研究の限界を含める）：

本研究の限界としては、口唇口蓋裂の重症度の情報がないこと、分類不明な口唇口蓋裂があったことが挙げられる。

結論：

本研究により、日本全国のデータを利用して、より正確な口唇口蓋裂のタイプの割合と合併症の状況を報告することができた。